死は無に帰するのか

現代の科学は「死は無に帰する」としているらしい。
まことにお目出度い話である。死が無に帰するのなら、現に生きていることは「実体がある」と云っているのだろう。その実体が死を以て無に帰するのなら、実体の生成原因は何なのだろうか。

死が個人の死を指すのであれば、なおさら個人の生の原因を説明しない限り、死もまた説明できまい。説明が出来ないのなら、「死は無に帰する」などは、「一生」と云う期間の偏向した観察に過ぎず、虚偽もいいところである。
次に集団または種の一部としての個体の死を以て、集団の死は起らないのだから、いづれにしても「死は無に帰する」ことは虚偽である。

通常、生の瞬間から死の瞬間までを「一生」と考えるのだが、その間だけが連続していて、生の直前と死の直後の不連続はどう説明するのか。常識的に考えれば有姿の一生と無姿の間には連続性があるとした方が説明しやすいし、筆者の経験もそれを支持するのである。全ての存在は、例えば人間について局所記述をしてさえ、生と死は様態の境界面であって、存在性は永遠である。

令和四年十一月十四日

大中臣正比呂　記